

なつた。それを見た教祖は心中大に喜び、其後は仕事の大方を淺吉に任せ、教を説く暇に淺吉を助けて居た。

越わて十月廿一日の神告に「麥蒔濟みて安心致したであらう、色紙五枚買ふて來い」、又重ねて「五枚重ねて切れ、幣串は曲尺で三尺五寸に致し、改めて上げよ」、教祖は何の事か判らないが、言はれる通りにすると「金子大明神(神より教祖文次郎に與へた神號)この幣を切り、さかに肥灰差止めるからその分御承知致しくれ、家業して外に出て居ると、人が呼びに來、戻り教へてやり、又出、又呼びに來る。農事の暇もない、來た人も待ち、兩方の損になる。何と家業を全く廢めて呉れんか、其方四十二歳の年に病むで、醫師も手放して心配し、神佛に願をかけて全快致した、其時死んだと思ふて欲を放れ、神を助けてくれ。家内も後家になつたと思ふてくれ、後家よりましぢや、物も言はれ相談も出来る。其方のやうに實意叮嚀に神信心して居る氏子が、世間に何ぼうも難儀致して居る。取次いで助けてくれ、神も助かり氏子も立行く、氏子あつての神、神あつての氏子、繁昌致し末々親にかゝり、子にかゝり、あいよかけよで立ち行く」と神告があつた、其後教祖は全く一室に立籠つて、明治十六年十月十日の終焉に至る